1　なぜ、日本人は米を食べているの？

パンとご飯の違いをもたらすもの

皆さんは、今日お米を食べましたか？　私は毎朝お米を食べています。最近は、パンやシリアルを好む人も多くなっていますが、私は、湯気の立つ炊き立てのご飯を前にしたときに幸せを感じます。

なぜ、日本人の主食はお米なのでしょうか。はたまた、ヨーロッパの人々が伝統的にパンを食するのはなぜでしょうか。細々した理屈はありますが、おおもとにあるのは、それぞれの地域の**気候**が、原料となる植物（イネ・コムギ）の生育に適しているからと言って間違いないでしょう。

イネもコムギも、アジアに生まれたイネ科の草本植物です。しかし、イネは高温湿潤な東～東南アジア原産であり、コムギは比較的冷涼で乾燥した西アジア原産です。もし身近に栽培している場所があれば、見てみるとさらに違いを理解できます。イネは、気温が上がった四月頃種まきし、夏を通して人工的な湿地（水田）で育てます（図2－1）。コムギは、

図 2-1　初夏に水田に植えられたイネ（2008.5、愛知県半田市）

気温が下がる十一月頃種まきし、冬を通して乾燥した畑で育てます。初冬の風物を謡った唱歌「冬景色」の中に「人は畑に麦を踏む」という一節がありますね。あれは、発芽してある程度育ったコムギを踏み、分けつ（株が大きくなり穂がたくさん出る）を促しているのです（図2－2）。

こんな特徴から、イネは温暖湿潤な南アジアから東アジアにかけて広まり、コムギは気温が低く乾燥したヨーロッパを中心に広まったというわけです。日本でもコムギの生産が盛んだった時代がありますが、イネの裏作として利用されていました。栽培サイクルがいずれも半年でちょうどよかったのです。しかし、収穫期は梅雨の頃です。日本の気候に最適な作物とは言い難い。大量生産可能な海外から、安いコムギがどっ

図 2-2　冬を越して分けつしたコムギ（2015.3、神奈川県横浜市）

と入ってきたこともあって、日本でのコムギ栽培は下火になりました。

この一例を見ればわかるように、気候は、地域の文化を大きく左右する重要な要因になっています。気候の多様性が、文化の多様性を生んでいるとも言えるでしょう。気候を理解することは、世界の多様な暮らしを理解することにもつながるのです。

気候とは何だろう

気候のお話をする前に、踏まえてほしいことがあります。「気候の話です」と言うと、「気象について説明を聞くんだ」とつい思ってしまう人がよくいるのです。ですが、気候と気象は、ちょっと違います。

確かに、どちら大気の状況を示します。私たちは普段、「晴れて蒸し暑いですね」

というように空模様を話題にしますね。でも、この状態はずっと続くわけではありません。今は晴れていても、夕方にざっと雨が降るかもしれないのです。ざっくりと言えば、こうした一時一時の大気現象を、気象と言うのです。

しかし、毎日欠かさず気象の記録をとってみると、どうやらこの時期は雨のほうが多い、などということがわかってきます。別の地方で同じことをやってみると、同じ時期なのに、今度は晴れのほうが多いこともあるでしょう。このように、長い期間気象を調べると、その場所の大気の特徴（あるいは平均的な状態）が見えてきます。これが気候です。

わかりにくいと感じる人は、人の行動に例えてみるとよいでしょう。人は、泣いて笑い、そして時には怒り、その時々の感情を顔に表します。これは気象に相当します。しかし、いくらか時間をかけて付き合うと、この人は、泣くことの多い「泣き虫さん」だ、怒ることの多い「怒りん坊」だ、などということがわかってきます。これは、長い期間を通じて見たときのその人の特徴を示しているわけで、「気候」に相当します。

気象と気候には、もう一つ大きな違いがあります。気象は普遍的な大気の物理現象です。ある条件が揃えば、世界のどこでも同じように雨が降り、どこでも突風が吹きます。どんな人でも、悲しいときは泣き、腹の立つときは怒るようなものです。一方、気候は地域固有の大気の状況です。つまり、場所によってまちまちであるということです。そんなことから、気候を明らかにする気候学は、地理学の重要な一分野として発展してきました。